

# 政策の補完性

## ■技術の補完性

今回は、1月22日の日経新聞に掲載された技術経営論を専門とする柴田友厚学習院大学教授のコラム「技術の補完性」を参考に話をしたいと思います。

同教授のテーマは「技術体系の転換過程をどのようにマネジメントするのか」というものですが、そのポイントは「急速な転換を引き起こすものは、ある技術とある技術の補完性が生み出す力である。そのような場合、両者の間に相互に促進し合う循環サイクルが形成され、それが閾値（変化を起こすために必要な刺激の最小値）を超えると急速に価値が高まる」という部分にあると私は感じました。

また、同教授は「急速な転換を引き起こすものとはどういうことか、また閾値を超えると急速に価値が高まるとは何を言っているのか」を、12年のコダック社の破綻を例に出して説明しています。

## ■コダック社の失敗

‘00年を迎えるまで絶好調であったカラーフィルムの世界需要は、その年を境に最盛期の半分まで急激に減少していきしました。原因はデジタルカメラへの転換が急速に進んだことによります。この時の「ある技術」とは「デジカメですが、もう一つの「ある技術」とは急速に普及し始めたパソコンでした。両者の距離感

きわめて近く、デジカメの価値は加速度的に上がっていききました。コダック社の失敗は、カメラ産業の動向だけを見て、デジカメとパソコンとの補完性に目を向けなかったことにあります。

同教授は「技術体系の転換期を乗り切るためには、その技術だけに目を凝らすのではなく、視野を広げてどの技術や産業と補完関係にあるのかを読み解き、それが生み出す動的プロセスを洞察することが肝要である」と述べています。

## ■「政策の補完性」

私はこのコラムを読んだとき、その視点と姿勢は行政における政策立案でも全く同じだと思いました。この「技術の補完性」を行政に置き換えるとするならば、それは「政策の補完性」と言い表すことができると思います。

よく私たちは、業務の縦割りを排し横断的に取り組まなければならないと言いますが、それだって「政策の補完性」の必要性を述べているのだと思います。例えば、先月の広報に書いた私のコラム「子育てと教育、そして経済」にしても、子育てと教育の補完性が生み出す好循環サイクルの可能性について述べさせていただいたものです。

## ■急がば回れ

もう少し分かりやすいところで「ふるさと納税」を例に考えてみます。

今年度のかほ市のふるさと納税額は6億円超となっております。私は、ふるさと納税は制度だけを見て取り組んでもなかなか伸びないだろうと思っていました。むしろ、シテイセールス、シテイプロモーションを軸にふるさと納税が補完する側になった方が効果が期待される。つまり、ただ単に商品売り込むというスタンスだけでなく、にかほ市の魅力を発信しながら知名度を上げ、多くの人に関心を持ってもらうための取り組みを、同時かつ優先して行うべきだと考えたわけです。「急がば回れ」です。

いったんこの好循環サイクルが回りだすと、ふるさと納税額が飛躍的に伸びただけでなく、「住みたい田舎ランキング」（宝島社）や「住みよきランキング」（東洋経済新報社）といった全国の魅力度を測るランキング企画でも、にかほ市は常に高く評価されるようになりました。これがまさに「政策の補完性」なんだと思います。



にかほ市長  
市川雄次